

## 3398 白夜の月：状況と心模様①

約 200 文字、画像があっても、短文だけに難しい。最初は初心者。

始めなければ始まらない。下書きからスタート、書き直し、いかに文章を削るか。

そんな状況の<sup>もと</sup>下、産経新聞「地球のかおり」掲載が始まった。

時は六月、アラスカ、白夜の季節、

闇の時間はほんのわずか、

午前 1 時は夜明け。明るくなる時間帯。

フェアバンクスから北方 200 キロ。

悠然と流れるユーコン河。北極圏も近い。

これから先は広大な凍った大地、ツンドラ。

アラスカ側からカナダ側に入り、

イヌビックをめざした途上での遭遇。

最初は、錯覚なのか、と目をこすった。

地上すれすれ、カニが這うように、横に移動、

大きさも日本で見るお月様とは全く違う。

光の加減で、透けるようにも見える。

目を離すと、元にあらずで、

見える位置が違ってくる。その動きの早さ。

初めて見る光景、天体ショーである。

我を忘れ、その神秘に心奪われた。

ひとり行脚ゆえの感動忘我の時、

何ものにも邪魔されず、気を取られず集中できる。

無という言葉は僭越であるが、素直な純な心、

孤独な自己を置くことにより、

自由になり、心が解放されるのは確かである。

無に近い不思議な直感や感性が働いたのか、

私であって私でない無我の状態？

やがて、白夜の月の姿が消えた。  
その夢の時間は、あ〜という間だった。  
理や知でないだけに、  
心の奥深い所に、いつまでも残る。  
和紙夢絵作品として残す。  
顔料は百年、和紙は千年の耐久性。

突然現実に戻った。  
何故か、首元や手の甲に、かゆみをおぼえた。  
原因は、偵察の蚊だった。  
六月とはいえ、寒いアラスカに蚊とは。  
息つく間もなく、次は蚊の大群の襲来。  
振り払えるものではない。

その場を逃げるしか手がない。  
蜂でなくて良かった。  
ここは、一目散に逃げるが勝ち、  
子供の頃を思い出した。

白夜の月、続きを次の心模様 3399 に。